

2. 国際会議の現場から見た国際標準化人材育成

古川 明男 (パナソニック)

2Q1.事業戦略の中で標準化はどのようにあつかわれているのでしょうか？

2A1.事業戦略の中に、標準化をしっかり組み込んでいる企業は少ないと思います。

2Q2.標準化活動をやっていく中で、事業側の人とどのようなコミュニケーションをとっているのでしょうか。

2A2.事業側はエキスパートを出し、担当する分野の人と一緒に活動しています。

2Q3.若い人が初めて国際標準化活動に取り組むことになったとき、その前にどのような研修が必要でしょうか。

2A3.初心者のための研修というのはありません。ほぼOJTになります。しかし、それではよくないと思います。私としては下記のようなことが必要だと考えています。

技術力のある人に、標準化に関するさまざまな情報を提供する。

力強く握手して話しかける。

リラックスして話す。話す中身のタイミングを計る。

2Q4.標準作成時に標準内容の落とし穴を見抜く力が必要だということですが、具体的にどのような落とし穴がありますか。

2A4.一つの文、あるいは一つのワードがはいっていることで、あるいは抜けていることで困ることがあります。たとえば、マーキングの規定において、指定された項目の表示がすべて“SHALL”だと、製品によっては表示スペースの問題が発生します。そういったところを、見落とさないようにしなければなりません。

2Q5.電池の安全規格に中国とアメリカが反対したということですが、中国はさておき、どうしてアメリカが反対するのでしょうか。

2A5.規格には作成者の名前と企業名が記されます。規格を使って事故が起きたときに、その人や企業が訴訟の対象になる可能性があるという理由です。

2Q6 電池の残量表示に関する標準化はされるのでしょうか。

第13回国際標準化教育研究会 Q&A

2A6. されていません。電池で使う物質によって異なるので標準化が困難なためです。

2Q7. 電気自動車では残量表示がないと、ガス欠ならぬ“電欠“がわからないが、そのテーマの標準化はどのようなのでしょうか。

2A7. 自動車用電池はJARIが担当しているので、電池工業会では扱っていません。